

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会

汝らは神なり

――詩篇第82篇――

1986年1月5日

小池辰雄

神のつどい 信行一如 無即一 新宗教改革 ドイツの神秘主義 神然愛 贖われた神 わが
宿る神 一如融合の世界 神的な自覚 神然の世界 「汝は神なり」 楽音

【詩篇82】アサフのうた

- 1 かみは神のつどいの中にたちたもう。
神はもろもろの神のなかに審判さはんをなしたもう。
- 2 なんじらは正ただしからざる審判をなし、
あしきものの身をみなしかたよりみて幾何時いくそのときをへんとするや。
- 3 よわきものと孤児みなしごとのためにさばき、
苦しむものと乏とちしきものとのために公平をほどこせ。
- 4 弱きものと貧しきものとをすくい、
彼等をあしきものの手よりたすけいだせ。
- 5 かれらは知ることなく悟ることなくして、
暗中くらきなかをゆきめぐりぬ。
- 6 我いえらく、なんじらは神なり。
なんじらはみな至上者いとたかきものの子なりと。
- 7 然されどなんじらは人のごとくに死に、
もろもろの侯きみのなかの一人のごとく仆たおれん。
- 8 神よ、おきて全地をさばきたまえ、
汝もろもろの国を嗣つぎたもうべければなり。

●神のつどい

あけましておめでとうございます。本年もまたよろしく願います。年頭はいつも詩篇をやりますが、今日は82篇をいたしましょう。

「唐傘からかさをかざして二年歩みけり」
ふたとせ

そういう、俳句みたいなものを私はつくった。「傘」は八十だから八十と二で、私は



八十二歳になったから、それで今日は82篇ということです。しかも、その内容は非常に今日に相応しい。これは非常に珍しい詩篇です。全く特異な詩篇です。

詩というものは、一人称になったり、二人称になったり、三人称になったり、なかなか読みにくいところがあります。

「¹かみは神のつどいの中にたちたもう。

神はもろもろの神のなかに審判をなしたもう。

「かみは神のつどいの中にたちたもう」という。古い解釈で言うと、この「神のつどい」というのは、他の民族神のように思いますけれども、どうもこの詩篇を読んでいると、この「神」は、人間の或る人たちのことを「神」と言っている。

「神は神として召した者の中に立ちたもう」

と、そういうように読めば、はつきり分かってくる。その「神として召された者」が何ごとかというわけです。

「神はもろもろの神として召された神々の審判をなしたもう」

という。

「²なんじらは正からざる審判をなし、

この「神」と言われているお前たちは正しからざる審判をなし、非常に不公平な審判をやっている。

あしきものの身をかたよりみて幾何時をへんとするや。

「³よわきものと孤児のためにさばき、

「やもめ」とか「みなしご」とか「弱き者」とか、旧約によく出てきます。これも新約と相通ずる。ヤーヴェーの神さまは、エホバの神は非常に憫みの神であるということは始めから出ているわけです。特に、申命記法というのは「愛の律法」といわれる。法律をやる人は「申命記」を研究するといひ。

苦しむものと乏しきものとのために公平をほどこせ。

「公平」という字はこの「審判」という字なんです。彼らのために正しい審判をなせという。

「ミシュパート」という字です。

「⁴弱きものと貧しきものとをすくい、

彼等をあしきものの手よりたすけいさせ。

第4節は非常に強い言葉です。ところが、その神として召されたはずの彼らは、

「⁵かれらは知ることなく悟ることなくして、

本当の真知を持たない。本当の悟りの世界を持たない。

暗中をゆきめぐりぬ。

地のもろもろの基はうごきたり。

地は崩れると言う。今、現代がそのようなわけです。20世紀はどうなるか分からんと。地



軸が揺らぎだした。

⁶ 我いえらく、なんじらは神なり。

なんじらはみな至上者いとたかきものの子なりと。

「私は言つたではないか、なんじらは神である、なんじらはみな至上者の子である
と」

この言葉をキリストが引用されておられる。

⁷ 然されどなんじらは人のごとくに死に、

もろもろの侯きみのなかの一人のごとく仆たおれん。

一般の人のごとくに、神から離れている人の如くに死ぬ。その「侯きみ」と言われるような選
びの人たちが本当の選びの、神さまの任務を果たしていないから、そういう意味で、この
場合の「侯きみ」というのは言っているわけです。

⁸ 神よ、おきて全地をさばきたまえ、

汝ももろの国を嗣つぎぎたもうべければなり。

今度は、詩人が祈っているわけです。汝、神さまは、イスラエルばかりでない、もろも
ろの国を嗣つぎぎさせてくださると。これがこの詩篇の全体の大意であります。

● 信行一如

キリストが引用されているのは、ヨハネ伝10章の後ろの方です。34節、少し前から読みます。

「²³ イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたもうに、²⁴ ユダヤ人ら之を取囲とりかこみて

言う『何時いつまで我らの心を惑わしむるか、汝キリストならば明白あらわに告げよ』

²⁵ イエス答え給う『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名に在つて行

うわざは、我に就あかきて証あかしす。

これも「名に在つて」です。業が証しているではないかと。一番素晴らしい言葉は業です。

去年はマルコ伝をやりました。『エン・クリスト』誌24号(1985年10月秋季号)、25号(1986
年1月冬季号)は姉妹篇みたいなものです。非常に私は行為のことを、

「信行一如」

ということを言いだした。キリストは、

「行なわざる者は、天国に入れない」

と言われた。

「今までのプロテスタントはあまりにもただ『信仰、信仰。信仰によって義とされる』
と言って、安住してしまっているからとんでもない。新しい宗教改革を一人びと
りがやらなくてはいかん」

というわけで、私は今やっているわけです。何も、私が宗教改革をやるわけではない。

²⁶ されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。²⁷ わが羊はわが声をきき、我は



彼らを知り、彼らは我に従う。²⁸ 我かれらに永遠の生命を与えれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪う者あらじ。

非常に強い言葉ですね。

「わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う」

という。キリストは私たちのことを「わが羊」と言う。神さまに全的に従うところの、信入し信従するところのもの、これが業^{わざ}なんです。第一の業が、神さまの中に入っていくことが信入です。そして、その御言に従って行くことに、これが転行するわけです。みんな離すことができない。それがどんなに惨憺たる姿であつてもいい。本ものなんです。だから私たちはもう奪われないうです、神さまが捕まえてしまっているから。神さまに捕まえられて生きていることが「永遠の生命」なのであつて、永遠の生命というのが何か分離してあるのではない。

●無即一

²⁹ 彼らを我にあたえ給ひし我が父は、一切のものよりも大いなれば、誰にても父の御手よりは奪うこと能わず。

その次が聖書で一番短い句です。

³⁰ 我と父とは一つなり』

たった三語。そして、一番深い言葉です。ヨハネ伝10章30節、これは今日の話と非常に密接な関係がある。さつき読まれた詩篇139篇もそうです。

「我と父とは一つなり」

「我は父なり、父は我なり」

と、姿が重なつてしまつてゐる。最後の世界はこの「一」の世界です。「無」とならなければ、「一」となれない。

「無即一」

「一」はまた「無限」なんです。これは数学の「1」とは違うんですから。もう、私はこれを瞑想していると、グーッときてしまう。しょうがないですよ、この頃は。「我と父とは一つなり」とは、

「我と汝キリストとは一つなり」

ということ。『エン・クリスト』25号のソネット（「新宗教改革」）に書いたでしょ。

³¹ ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。

「我と父とは一つなり」と言つたものだから、神を潰^{けが}すものだと言つて石で撃とうとした。

³² イエス答え給う『われは父によりて多くの善き業^{わざ}を汝らに示したり、その孰^{いずれ}の業のゆえに我を石にて撃たんとするか』

もう文句ないです。キリストのなされた業はみんな神さまを現した。福音書は全部、父を



キリストが身証し、身をもつて証しているところですからね。

³³ ユダヤ人こたう『なんじを右にて撃つは善きわざの故ならず、^{けがしごと} 瀆言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』³⁴ イエス答え給う『なんじらの律法に

「律法に」というのは、この詩篇のことです。

「われ言う、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。

詩篇82篇6節にそうあるじゃないかと。キリストは大事なところはピシャツと掴んでいらつしやる。

³⁵ かく神の言を賜りし人々を神と云えり。聖書は^{すた}廃るべきにあらず、³⁶ 然るに

父の潔め別かちて世に遣し給いし者が「われは神の子なり」と言えばとて、

これも、「^{いとたかきもの}至上者の子」と、さつきあつたでしょ。

何ぞ「^{けがしごと}瀆言をいう」というか。

「お前たちが言っている旧約の聖書がそう言っているのに、何が瀆言か」と。

³⁷ 我もし我が父のわざを行わずば我を信ずな、³⁸ もし行わば^{たとい}仮令われを信ぜず

とも、その業を信ぜよ。さらば父の我におり、我の父に居ることを知りて悟

らん』(ヨハネ10・23〜37)

なるほど、一つになつていらつしやるから、そのような業が自然に出てくる。あそこに私は、「靈然と業が生ずる」と書いたでしょ。御霊の力で生ずるから、これを「靈然」と言っただけです。

「こういうわけだから、さあ、行いましょうなんて、そんな二段構えではないぞ」というわけです。

「信仰ありて、^{おこない}行為なきものは」

なんていう、そういう概念は二段構えの概念です。信仰が本ものなら必ず行為は出てくる。ざるを得ないんです、どんなにそれが惨めな行為であっても。それがもし展開しなければ、その信は本ものの信ではないというだけの話です。だから、

「信即行」

であると同時に、

「信行一如」

であるということです。だから、これがどうしたって、今までのプロテスタントの概念を、またある意味において、カトリックの概念を突き破るから、それで私は言っただけです。

●新宗教改革

私は今度の『エン・クリスト』の表紙に謹賀新年と刷ってもらった。それはこれを年賀状に使うつもりだったんです。二百部ばかり余計に刷ってもらった。私は年賀状を一つも書かない。返事に、この人だと思う人にこれを年賀状代わりに送った。伝道になるから。



そうしたらば、キリスト新聞の武藤富雄氏という方――この人はいろんなことをやっている多面的活動家ですが――それから葉書二枚に言ってきた。

『エン・クリスト』一月号をお送りくださいまして、ありがとうございます。さっそく読みましたものは、「ノイエ・レフォルマツイオン」（新宗教改革）で、独文ソネットの麗しさとその内容とに驚嘆いたしました。小生は大学時代に既に自叙伝を書いており、その生活経験は散文詩で、創造は英文詩で書き、ウィンライトによりマクミランに送られましたが返却され、埋もれております。それは小生の死後、出版されるべきものであります。小生は大学法科三年生の頃、英詩人をもつて立つとしました。

武藤さんというのは詩が非常に好きなんだな。私の詩がここにところにずっと書いてありまして、

以下、吟誦すること三回。

即ち、このソネットを吟誦したという。

先生のドイツ語の力と、詩的情操の豊かさに打たれることしばしばでありました。宗教詩人としての先生に深く敬意を表します。今後のご健闘、ご制作をお祈り申し上げます。」

なんて書いてある。武藤さんに、

「そんな死後なんて言わないで、キリスト新聞にもう連載しなさいよ」

と私は返事を書いた。それから、こないだはこないだで、仏教の方の宗教哲学者から、

「驚いた」

と言って手紙が来た。

息子の信雄も言っているんですが、とにかく、コンピュータで何でもかんでも視覚にうつたえることばかりで、今の若いのは本がだんだん読めなくなってきた。人間はどうなるかな。

「結局、業でもつて神的なものを展開するよりか他に世の中を本当にひっくり返す

ものはなくなってきた。だから、これからはお父さんの時代だ」

というようなことを、彼は言うんだよ。

私はいわゆる無教会からおん出され、また自分でも出た。「キリスト召団」なんていうのは小さなものだけでも、これは、しかしながら、本当に歴史的な使命をもっています。

私は今、このソネットを三回書くと言ったでしょ。一番最後はもの凄い広大なところを書きます。三連のソネットで新しい宗教改革の気持を歌いあげようと思っています。まだ書かないうちに、これはちゃんと三つあるということが直観されています。

だから、年頭の集会は大事なのに、なぜ来ないかと私は思う。残念だなと思う。日曜は、だてや習慣でやっているんじゃない。一回ごとが真剣勝負で、私たちはこの日曜をやっている。



この、

「汝らは神なり」

とは、これは最高の言葉なんです。

「父の全きが如く全かれ」

という新約聖書のキリストの言葉に応ずるものは、旧約のこの「汝らは神なり」という言葉です。しかも、それはキリストがちゃんと、

「いう言っているではないか」

と示された。82篇というのは驚くべき詩篇です。

●ドイツの神秘主義

それで、ドイツの神秘主義のことをちよつと言いたい。何も私は神秘主義者たちをそのまますぐ鵜呑みに、いいとは言いません。けれども、彼らはその角度の魂であった。エックハルト、タウラー、ゾイゼ、それからクザーヌスというちよつと変わったのがいる。だいたい後で、ハーマンというのがゲーテやカントの頃にいた。スウェーデンボルグもそうだ。アッシジのフランシスとかザビエル。そういうご連中です。それから、こちらの第一級の、あるいは超一級の仏教の坊さんたち。そういう次元は、このキリストの光の中にみんな入ってしまう。だから、楽しい。

宗教改革の第三番目のソネットは凄いソネットになるから。私たちの信仰なんて、自分の信仰なんて、そんなことを言うのはもう面倒臭くて、また、そんなことを言う必要もない。まことの現実と言いたいくらいだ。

今、エックハルトの全集が出てますけれども、これはその当時のラテン語だ。ただ、エックハルトという人はドイツ語でかなり説教した。その時のドイツ語も今とはだいぶ違いますけれども。エックハルトは1260年から1328年、13世紀後半から14世紀始めにかけての大変な宗教哲学者です。しかし、異端とされたわけです。彼は、

「神と私は、我々は一つである」

ということを大胆に言っている。

「自分を捨てて自分に死んだ魂 即ちいわゆる離脱した魂のうちに、神が自らのうちに生むのと同じ子なる神を生みこんでくださる。魂を神の生命のうちに甦らせる」

と。そういう、「神の子の誕生」というようなことを言いだした。もちろん、これはそのまま受けとれませんよ。けれども、ただ「罪、罪」と言っていないで、その素晴らしい、本当に神と融合する魂の境地が――しかも、己を捨ててかかっているんですから――その

「神の誕生」

というのがエックハルトの有名な内容です。たくさんいろんな言葉で展開してます。いわゆる論理的展開ではない。波動的な展開をしている。頭ももの凄くいい人ですけども。



それから、もう一つ――私が

「突破の神学」

と言ったね――あの突破的なところがもう一つある。

「魂が神のうちに大いに突っ込んでいって、神の根底を極める。神さまと一つそのもの、一切の余計なことは絶して、まるで沙漠の中に一人いるようなぐあいに、神の根底に徹底するという、そういう自己突破をなくはないかん」

と。だから、「誕生」ということと、

「己を突破して神の中に突き進んで行く」

ということ。上からの本願的な作用と、下からの悲願的な追求と、そういう両面を語っています。

「神さまは入ってきて神の子を生んでくれる」

というような、そういった絶対に受動的に自分を開け放つ。そして、

「神と合一する、追求してやまない」

という非常に能動的な面と、そういう両方の作用をやっている。

●神然愛

そして、おもしろいのは、

「神は私を愛するということと、神は私を愛せざるを得ないということは違つんだ」と言う。

「神は私を愛する」

というのは恩寵の世界、恵みの世界です。ところが、

「神は私を愛せざるを得ない」

というのは、私の言葉で言うところ、霊的、必然の世界です。私はこれを

「神然愛」

と言う。神の性質上、神さまは愛せざるを得ないんだと。

「神さまは私みたいなやつも愛してくださいさる」

というのは恵みなんだ。「神は私を愛する」というのは絶対恩寵なんだ。ところが、

「神は私を愛せざるを得ない」

というのは、神さまの性質上、どうしても私を愛せざるを得ない。だから、神の神然愛である。そういうことを言っている。おもしろいね、さすがにエックハルトは凄いひとだ。

一番凄いのは、この「ざるを得ない」世界です。雨が降れば、地面は濡れざるを得ない。水は低きに流れざるを得ない。これを「法」という。水は低きに流れ去らざるを得ない。この水の例えも言っているんですよ、神さまの性質の中で。自分を見て、

「罪、罪、罪」



と言って一体何になるかというわけです。十字架の贖いのことはあまりはつきり言わない。

「創世記1章27節に『本来、神の似姿に造られている』とある。神性を本来持つて

いるのではないか、それに気がつけ。そして、一つになろうじゃないか」

という、そういう非常に明るい角度が、この神秘主義者の大体共通した角度です。もちろん、ゾイゼあたりは非常に深く十字架のことも言ってますけれども。

●贖われた神

キリストが、

「汝らは神なり」

と、この詩篇を引用しておっしゃった。もう、これはありがたくてしょうがない。ところが我々は、現実はなかなかこの神でない。キリストは「神なり」とおっしゃったが、それは、

「我々は十字架で贖われた神」

なんだ。本来、神である。そして、現実には、贖われた神である。「贖われた神」というその神は、^{わたくし}私でできないです。始めから私でできないけれども、贖われたる神性が来ている。我々は贖われたる神である。それはここに聖霊の霊核がある。朝から晩まで神的になんか我々はとても行動できない、しょうがないものですけれども。この霊核をキリストは置いてくたさった。それは御霊です。現実には、どれほどこのところは暗黒の雲が閉ざしていても、絶対にこれは光っている。この光はこの暗黒を、「99」の暗黒を、「マイナス99」をこの「1」の光がやつつける。そういう凄い「1」なんだ、この霊核というのは。それを皆さんはいただいている。

「御霊を宿さざれば、キリスト者にあらず」

とパウロが言ったのを、私が例えて言えば、そういうわけです。

今朝、私は起きて庭を見たら、しだれ桜の枝に露が一杯ある。それが朝日を受けて、まあ、金銀碧玉、本当に七色にチカチカ、チカチカ、キラキラ、キラキラ光っているんだ。ああ、きれいだなあ、とても宝玉もかなわないなと思って、しばらく見入っていた。皆さん一人ひとりのはあの朝露のように陽の光を受けて、それを中に受けて反射している朝露のように、それぞれの色彩をもって光輝く神である。

だから、もう心配ない。この御霊が来ているから。絶対に負けない。どんなことがあっても、負けない。いや、いろんな事が、雲がかかればかかるほど、逆にこれが光ってくる。もう運命環境、何でもござれと。不如意になればなるほど逆に私は力が入ってくる。然り、アーメンということです。問題は自分の信仰なんていうものではない。この御霊が光りだしたら、そうしたらもう、何でもやっていることが全部、そういった凄い力と光とを発してくる。皆さんがなさっていることが全部そうなりますよ。そのかわり、これがなかったら、いくら技術が進歩したってダメなんだ。もうあるところでお終いになってしまふ。



●わが宿る神

「汝らはわが宿る神なり。私が宿っている神だよ」

ということ。手離しで言っているのではない。それを、

「汝らは神なり」

と手離しで言っているような表現がもの凄い。だから、平伏さなくてはダメです。平伏して、「そうです、キリストさま、あなたが光ってください。語ってください。行動してください」

と。キリストと一つになっている。「してください」といつて、自分がいい加減な気持ちでいるのではないですよ。「してください」ということは、

「あなたが私の中で一緒になって、一如になって行きますよ」

ということ。だから、私は大胆に書いたでしょ。

『新宗教改革』（1985年10月27日作）

——ソネット第一（独和対照）——

ルターのカトリックへの宗教改革は

史上にその効果をもった、意の如く

どちらの信条もあるにはあるが。

プロテスタントもカトリックも、そんなことは問題ではない。

だが私は信仰と行為を新たに一如とした。

これは生意気のようにだけでも仕方がない、そうなんだから。

信仰自身が即ち内的行為なのである、

全存在を以て基督の中に己を投入するからだ。

信仰はみ霊の故里に入りゆくことだ、

祈りが原存在に帰入することである如く。

かかる信仰で汝キリストと私は一如となる。

かかる信仰から外的行為が靈然と生ずる。

その行為がどんなに惨めであっても、それは本ものだという事。

私は無者。み霊のキリストがわが一切である。

「信仰と行為」の問題は揚棄された。

信仰と行為なんていう、そういう分裂したような問題はもうアウフヘーベンされて、もう問題でなくなってしまった。

噫、キリスト神秘よ！ 審議は無用。

信仰行、信仰即ち一切である。

この「即ち一切」（アイン ウント アッレス）という言葉も、私はエックハルトを読んでいたら、出てきた。その前にはプロティノスが凄いいんだ。ああいう素晴らしい本を読んで



いると、もう書くのが面倒臭くなってしまつてね、読み耽つて徹夜もしたいくらいだ。もうしばしば午前2時だの、あるときは3時にもなつてしまふ。すこし寝坊するけれどもね。しょうがない、もう82歳だから。

●一如融合の世界

私たちは、こういう神秘主義者やなんかを読んで楽しいけれども、それをちゃんと正しく読めるんです。ということは、何と言つても、キリストの十字架の贖いが土台にあるからです。これを抜きにしたら怪しくなる。私たちは「贖われたる神」である。

「⊕」

この図(○の中に十)は「十字架・聖霊」の図です。この現実でもつて、この信の現実でもつて読むと、何でも本当に読めてくる。ちゃんとオリエンティールンできる。位置づけすることが出来る。スウェーデンボルグがいくら素晴らしくたって、呑まれないんです。素晴らしいことは結構だ。人それぞれ賜物があるからね。皆さんのその自分に賜る賜物でもつて進んでいただきたい。

エックハルトの言葉に、

「人間が神のゆえに自分自身を否定して、また神と共に一つとなっている限り、彼は造られたものよりもむしろ神である」

と書いてある。ここでもやはり、

「もうそうなつたら、神だ」

と言う。

15世紀にクザーヌスという人がいる。ゲートは非常にクザーヌスが好きだった。クザーヌスが非常に広い「アインハイツ」を、「全一」的な世界を持っているから。

「最も単純なる一性」

ということと言っている。

「二の性^{さが}が最も単純で最も素晴らしい世界だ」

とクザーヌスも同じようなことを言っている。クザーヌスの全一^{ぜんいつ}的な角度は素晴らしい。

「世界がだんだん縮減していく。収縮してダメになっていく。そして、終いには低落してしまふ。それは神さまと本当に一つにならないからだ。神の絶対というものの中に自分を入れていけば、縮減されるようなことにならない」

と。非常にクザーヌスも語っていますね。ヤコブ・ベーメもそうです。

「神は一切の中にあり、一切は神の中にある」

という。こういう連中はみんな、そういった「一如融合」の世界を語っている。ルターでも、

「信仰は人間を二つのものにする。そして、神と二つの霊にする」

という。ここでもやはり「一つ」と言っている。



「神と一つの事態、また一つの霊にする。それが信仰だ」

というので、ルターにおいても信仰は決して観念では勿論なかった。あの有名な言葉があるとおり。けれども、ルターさんをもう一つ突っ込んで私が言っているわけです。ルターさん自身は、パウロもルターも「信仰のみ」と言いながら一番活動的であった。ということとは、彼らの信仰がいかに本ものであったかということも、それで証明されているわけです。

● 神的な自覚

特に東洋はこの静の世界が非常に深い。静動一如というのは呼吸の世界だから。この静動の呼吸がなかったら、生きませんからね。深くその中に信じ交わって、その中に深く沈潜すると、沈潜されている主体はもの凄い力を持った生命的な光的なものだから、それがいかなる時でも動として転出するわけだ。これはマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の最後の30節のところでも同じようなことを言っている。

そういうことで、

「汝らは神なり」

という言葉は、私には素晴らしい

「贖われたる神」

ということ、平伏してこれを自覚する。そういった神的な自覚です。それは厳かな世界ですから。手離して「俺は神だ」と言ったら、これはサタンになる。霊的傲慢は一番恐ろしい。だから、「汝らは神なり」なんていう言葉は危ないです、名刀みたいだから。正宗の名刀以上の名刀だから、ヘタすると自分を切ってしまう。しかしながら、そういう神的な絶対恩寵の――また、さっきの神然の、神然りの――神然たる現実を賜っている。ざるを得ない。神は愛せざるを得ない。私たちを愛せざるを得ないのであって、

「私たちがどこへ逃げて行こうが、神さまはそこに居給う」

という詩篇139篇のとおりです。「汝知り給う」というあの号（『エン・クリスト』9号、1982年5月）も大事な号ですから。あそこに徹底して書いてある。

私はとても手紙なんか書いている暇がないから、時々、『エン・クリスト』誌を私の手紙だと思って読んでください。今年は正直、年賀状は一つも書かなかったけれども、お返事はそのようにして書く。返事的时候は、必ず私は何か一言書きます。あなた方からみな戴きましたけれども、まだお返事はあげてない。そのうちにおもむろに書くかもしれない。とにかく、私はひとつも粗末にしているんじゃない。いつもこれからは年賀状は書かないけれども。しかし、書かせられる。心をこめた年賀状に対しては、応えざるを得ない。ただ印刷だけだったら、そんなのはご免こうむる。返事を書かなくても、私は受けとって瞬間に祈ります。本当ですよ。それがもう返事なんです。よくね、「何とかであることを祈ります」なんて書くが、ちつとも祈ってない。あの「祈ります」という言葉は偽りなんだ。



祈りが十字架に架かってしまっている。私の祈りは短い。時間がかからない。だけれども、それは本ものです。それはキラツとした光みたいなものです。

●神然の世界

それで、この82篇の6節の他にはもう言うことがないんだが、しかし、そのような、

「神として選ばれたお前たちがなぜ弱者をいたわらないか、そういった人たちを助けないか」

と。どういう隣人であろうと、渴いていたら水一杯をやるとは、やはり、愛は感情ではない、行為なんだ。だから、確かに今のプロテスタントは、ある意味においてカトリックも、ある一つの限界に来ている。カトリックであろうと、プロテスタントであろうと――仏教だって何だっでもいいですよ――全部、それが自ら宗教改革をしていかなかったら、20世紀はひっくり返ってしまう。

御霊の力では絶対に行き詰まりませんから。いつもニコニコして笑いながらできるというわけだ。クリスチャンはしかめつつらをしていたらダメだよ。この『エン・クリスト』25号は、そういう意味で非常に大事な号です。「新宗教改革」と「ヤコブ書の根本精神」は相連なっている文章ですから、大いに読ませたい人にやってください。買わせたい。ある人は、「買わなければ読まないから、買います」と言う人もある。とにかく、一対一の伝道をしてくださいよ。私にしょっちゅう言われるようではダメなんだよな。

皆さん、毎日毎日を楽しく、はりのある生き方で行ってください。この信の世界に入ったらもう、ざるを得ない、

「我動かざるを得ない、我学ばざるを得ない」

ということ、で、「ざるを得ない」世界なんです。「ざるを得ず」というのはえらい言葉だ。マルチン・ルターのあの宗教改革の、

「私はかくあらざるを得ない」

というのが、ざるを得ない世界だ。これが天的必然です。天的必然が一番力を持っている。それを「靈然・神然」という。今日は、「汝らは神なり」というのはこの神然の世界です。

●「汝は神なり」

佐藤一斉、佐久間象山、吉田松陰のこの三人は大変なひとだ。その後の品川弥次郎がD学園の創始者なんだから、それだけ大変な霊的な伝統を持っている。大村仁太郎、天野貞祐それから、この変わり者がその次にくる。学園の教育理念を書いてくれなんて、学校から出て、そういうことを言われるんだ、私は。

とにかく、この聖霊の世界は、新約聖書のキリストの直弟子の次元は、何と素晴らしいか。もうこの他にないです、キリストの直弟子の次元の他に。だから、限りなく前進してください。



元日は一年の計のときであるなんて、昔は私たちは小学校時代からそういうことを言われていたけれども、この頃の子供はそういうことは何も考えないらしいな。一年の予定を作るとかね。今の教育は本当にダメだ。教育者自身が自ら教育しないでどうするかと言うんだ。内村鑑三、賀川豊彦というのは素晴らしいです、それぞれその特色が。それはやつぱり、ただ「多」ではないですよ、大勢で「ワッショイ、ワッショイ」ではない。この「個」、あなた方ひとりの「個」です。私はよっぽどさつき今日の題を

「汝は神なり」

と書こうと思ったんだよ。けれども、「汝らは」にしたけれどもさ。個体なんです。「我ら」と言って、ただ多を頼んでいるような「我ら」だったらダメなんだ。そういう「我ら」や「汝ら」ではダメですよ。「汝ら」の前は、「汝」でなくては。「汝」がいくつもあつて、はじめて「汝ら」なんですからね。ところが、教会概念というのはヘタすると、「汝ら」が先にあつて、それから「個」だなんて言っているんだ。まあ、そういう面もありますけれども、しかし、歴史をつくっているのはみんな個なんです。みんなこれが動きだしている。カーライルの「英雄崇拜論」ではないけれども。あの『ヒーローオアシップ』という本は素晴らしい。私は青年時代に一生懸命で読んだ。

「千万人と雖も吾往かん」

と、孔子が言ったでしょ。さすがは孔子さんだ。その「千万人といえども我ゆかん」という、この個に神が凝集するわけだ。そうしたら、これが無限の多になってくる。一即多というその多は、多即一のときのその多は、そういう多でなかったら、即一にはならない。一人びとりを神さまは世界中に個として造っているんだから。しかも、この指紋すらも、何億人といながら、指紋がみんな違うというんだからおそろしいね。こんな似たようなものが、どうしてそんなに違うんだろうかと思う。これは全く不思議だ。だから、神さまは最大の芸術家だと私は言っているんです。最高の芸術家です。もし、芸術をやるならば神を学べ、神の作品を学べという。人間も神さまの作品であるし、自然も神さまの作品である。

●楽音

もつと大胆な芸術家が出てもらいたいよな。日本はしょうがないな、そういうところが。結局、大きな世界観も人生観も神なしでは出てこない。本当は「観」ではないんだ。人生道、人生路です。路が道に、天道に即すること。

「天道に即する地路」

でなくてはいかん。この地路は、一人びとりが――「路」は「各々の足」と書くんだから、素晴らしいね、漢字というのは。各々の足で歩くところは他の人が歩けない。その路はその人限りしかない。それが天道に即しているかということが問題なんです。それを「道路」というんだ、本当は。そういう道路を歩いていなくて。人真似はひとつもいらない。



「二人びとりは天下一品だ」

と私は言うでしょ。「落ちこぼれ」なんてのは絶対じゃないんです。あれはけしからんね、教育界で「落ちこぼれ」なんていう言葉は。人間をただ成績で測ったりして。冗談じゃない。

「二人びとりは本当に神さまに造られているんだから、その賜ったその焦点になるところに打ち込んで行け、必ずそれは成就していくから」

と。そういう教育をやらないからいかん。

私は中学高校の校長をしていたときに、はつきり言ってやったんだ、そのことを。

「自分たちの賜っている大事なものがある。それを中心にして勉強しろ。数学が好きだったら、語学はゼロでもいいと言わないけれども、そういう中心のある勉強をしなければダメだ。一人びとりは、必ずこれは私は優をとってやると、それくらしいの気持ちでやっていけ。先生もそのつもりでもって一人びとりを指導してくれ」と言っているのに、やらないから、もういい加減でサヨナラしてしまった。けれども、

「やつぱり、小池校長は早く辞めてしまつて惜しい。また帰つて来てくれ」

なんて。誰が帰っていくか(笑)。そんなことを言っているんだよ、今頃になって。

いいですか、皆さん、「天下一品」ですから、そういう意味において自重していただかないかね。学問をする人は、至るところこれ書斎と思わなくてはいいかんですよ。本がなくなつて、自然を見れば、これが本なんだから。

「自然は活ける本だ」

とゲーテが言った。その通り。そういうことで、

「至るところこれ書斎、至るところこれ天国を現するところ」

と。まあ、楽しくてしょうがないですよ。だから、福音でなくて、

「楽音^{らくいん}」

だと言っている。楽しい音だと。音楽も、暮れになるとベートーヴェンの「第九」をやっているが、本当にベートーヴェンやシラーの心になって歌っているかね。また、その心になつて聴いているかな。そうしたらもう、

「幾百万の人たちよ、あい抱けよ。この接吻を全世界に行きわたらせろ」

と。あの18世紀の終りの頃のドイツは素晴らしいよ、正直。彼らの魂は本当に輝いていたね。とにかく、漫画と週刊誌で氾濫しているような日本はどういうことになるか。まじめな本を一生懸命で信雄(長男)がやっているけれども、さっぱり売れないで、みんな戻ってきてしまう。もう、借金だらけだよ、あのK書房なんてのは。いいよ、もう潰れるなら潰れてもかまわないから。ちゃんとしたことをやって潰れるなら、名誉だから。

いいですか、1986年は、その意気込みで進んで行きます。終わります。

